

《巻頭言》

グローバルな視点から環境を考える

城西国際大学 環境社会学部長

鈴木 弘 孝

平成 26 年 10 月に IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の 3 つの作業部会の統合報告書が IPCC の総会で承認された。この報告書によると、1880 年から 2012 年の 112 年間の間で、地球の平均気温は 0.85°C 上昇しており、20 世紀の半ば以降に観測された温暖化は人間の活動が原因になっている可能性について、95% の確率で有為であると結論づけている。現状のまま CO₂ の排出が続くと、今世紀末には、1986~2005 年の平均と比較して、最悪で 4.8°C の平均気温の上昇が報告された。この結果、南極、グリーンランドの氷や氷河が融解し、海面が世界平均で最大で 82cm 上昇すると予測されている。海面が 65cm 上昇すると日本の海岸線の 8 割以上が消失するとされていることから、80cm 以上が上昇すると日本一長い海岸線を有する九十九里海岸もその大半が消失する可能性が高い。古来より、和歌などで親しまれてきた日本の典型的な原風景である「白砂青松」の景観が消失することとなる。

一方、わが国では、古来より、自然と人間とが共生し、豊かな自然を育み、多様な生物とも共存してきた「里山」が、今日、衰退の危機にある。「兔追いし彼の山、小鮎釣りし彼の河」に唄われた日本の「ふる里」は、里山が原風景となっている。燃料革命や農業、林業等の一次産業の構造変化、従事者の高齢化と後継者不足などから、里山を形作ってきた多くの田や森林が放置されたままとなっている。2007 年に策定された「第三次生物多様性国家戦略」では、里山に代表される人為の縮退に伴う生物種の減少等の生物多様性の危機を「第二の危機」と位置づけている。日本の豊かな自然も、内部から大きくその様相を変えつつある。2010 年に名古屋で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議では、日本の「里山」に見る自然との共生の営みが高く評価され、「里山イニシアチブ」が採択された。「SATOYAMA」が、生物多様性のキーワードとなり、世界の共通語としてグローバルに認識されたのである。

今後、CO₂ の排出量を削減し、自然との共生により多様な生物との共存を図るためには、経済と産業の構造、エネルギー供給のあり方を「環境」の視点から、抜本的に見直し、経済の「グリーン化」を強力に推進していくこと、そのためのイノベーションが必要かつ不可欠となる。その際には、環境に関する個々の要素技術のイノベーションとともに、学際的な領域分野である「環境」について、グローバルな視点に立ち統合的に問題解決に当たる「グローバル環境人材」への必要性がますます高まることになると思われる。本学部では、文理融合

の「統合的視点」を重視し、自然科学と人文科学の立場を超えて学際的な研究と教育を実践しており、研究活動の成果の一端は年度ごとに取りまとめ、『城西国際大学 環境社会学部紀要』として刊行している。本学部における研究成果が、グローバルな環境課題の解決に向けて、自然と共生し、環境への負荷の少ない「持続可能な社会」の形成に寄与していくことを念願している。